

革新的自殺研究推進プログラム
令和 4 年度採択研究課題(令和 6 年度終了)に対する事後評価結果の公表

いのち支える自殺対策推進センターでは、令和 4 年度に革新的自殺研究推進プログラムの研究課題として 3 つの研究領域で合計 16 件を採択し、このうち 11 件の研究課題が令和 6 年度末をもって終了した(他 5 課題は令和 5 年度末で終了済)。終了した 11 件の領域ごとの研究課題名と研究代表者は以下のとおりである。

【領域1:子ども・若者に対する自殺対策】

- ① 課題番号 : R4-1-2
研究課題名 : SOS の出し方教育における地域連携モデルの開発
研究代表者 : 江畑 慎吾(中京学院大学 短期大学部 保育科 准教授)
- ② 課題番号 : R4-1-3
研究課題名 : 児童生徒の自殺リスク予測アルゴリズムの解明 :
自殺リスク評価ツール(RAMPS)を活用した全国小中高等学校での大規模実証研究によって
研究代表者 : 北川 裕子(東京大学大学院 教育学研究科身体教育学コース健康教育学分野 特任助教)
- ③ 課題番号 : R4-1-4
研究課題名 : 全小児科医を対象とした大規模調査 :
「小児科による自殺防止セーフティネット」構築へ向けた課題整理と政策提言に関する研究
研究代表者 : 呉 宗憲(東京医科大学 小児科・思春期科学分野 講師)
- ④ 課題番号 : R4-1-5
研究課題名 : 子どもの抑うつに対する遠隔メンタルヘルスケアの社会実装と早期受療システム整備 -KOKOROBO と子どもの精神疾患レジストリ連携
研究代表者 : 佐々木 剛(千葉大学医学部附属病院 こどものこころ診療部 准教授)
- ⑤ 課題番号 : R4-1-7
研究課題名 : 学校において教職員がゲートキーパーとして機能するためには何が必要か？
—チーム学校によるマルチレベルな自殺予防体制の支援・組織モデルの構築—
研究代表者 : 目久田 純一(梅花女子大学 心理こども学部こども教育学科 准教授)

【領域2:自殺ハイリスク群の実態分析とアプローチ】

- ⑥ 課題番号 : R4-2-2
非行を有するハイリスクな青少年の自殺・自傷行為の理解・予防・対応策に関する包括的な検討

研究代表者：高橋 哲(お茶の水女子大学 基幹研究院人間科学系 准教授)

⑦ 課題番号：R4-2-3

がん患者の自殺に関する全国実態分析とがん診療病院自殺対策プログラムの検討

研究代表者：藤森 麻衣子(国立研究開発法人国立がん研究センター がん対策研究所 サバイバーシップ研究部 支持・緩和・心のケア研究室 室長)

【領域3:ビッグデータ・AI 等を活用した自殺対策】

⑧ 課題番号：R4-3-1

視覚情報の AI 分析を活用したメンタルヘルス DX プロジェクト

研究代表者：奥山 純子(東京農工大学 保健管理センター 准教授)

⑨ 課題番号：R4-3-2

IoT 活用による子どもの援助希求行動の促進に関する研究

研究代表者：久保 順也(宮城教育大学大学院 高度教職実践専攻(教職大学院) 教授)

⑩ 課題番号：R4-3-4

過量服薬のゲートキーパーの養成を目指したビッグデータ解析と新規養成システムの構築：
地域の薬局を「気付き」と「傾聴」の拠点とした過量服薬の防止

研究代表者：永島 一輝(千葉大学 薬学研究院 先端実践薬学講座 実務薬学研究室 助教)

⑪ 課題番号：R4-3-5

兵庫県における医療ビッグデータと法医学データを組み合わせたコホートデータベースを用いたリアルワールドデータによる自殺リスクの検討

研究代表者：宮森 大輔(広島大学病院 総合内科・総合診療科 診療講師)

革新的自殺研究推進プログラムにおいて、研究課題の採択と評価を行うガバニングボード(GB)は、提出された令和 6 年度研究成果報告書をもとに、11 件の研究課題につき令和 7 年 7 月に開催した第 2 回 GB において、事後評価を実施した。

令和 6 年度末で終了した 11 件の研究課題は、いずれも自殺対策の推進につながり得る重要かつ先進的・革新的な研究テーマを取り上げたものと評価できる。研究は約 2 年半という限られた期間であったが、各研究領域の趣旨を踏まえつつ、自殺の背景や対策上の課題に迫るとともに、今後、対策をさらに推進させる上で重要な示唆を含むものであった。

領域 1 の 4 つの研究課題は、昨今、自殺者数の増加が顕著であるなど、事態が深刻化していることも・若者の自殺実態とその背景に注目している。いずれの研究課題も、こどもや若者本人のリスクをいかに拾い上げ、適切に支援へとつなげるかという観点から、様々な調査等を行うとともに、社会への実装に向けた取組を展開している。

- ①「課題番号 R4-1-2」は、相談に関する知識を得ることと、SOS の受け止め方の学習をすることが、抑うつや軽減や支援者にプラスの影響を与える、ということを明らかにしており、現場への知見の反映といった点において期待できる。
- ②「課題番号 R4-1-3」は、児童生徒の自殺実態が非常に深刻である中、全国 170 校で6万人超を対象にシステムの運用がなされていることや、学校現場のニーズに合わせてシステム改良が適宜なされている点など、研究成果の社会への還元を目指す本プログラムの趣旨に合致するものと評価できる。
- ③「課題番号 R4-1-4」は、本プログラムにおいて当初設定した目標をすべて達成するには至らなかったものの、小児科医を対象とした調査の意義や、研究課題の設定、困難な課題にチャレンジしようとする姿勢や意欲などは評価できる。
- ④「課題番号 R4-1-5」は、KOKOROBO のプラットフォームが千葉県内の一部地域で実装されるとともに、それを通じて遠隔でのメンタルヘルスケアシステムが、一定の成果を上げていることは評価できる。今後は他地域への展開等に向けた検討を期待したい。
- ⑤「課題番号 R4-1-7」は、令和6年度に実施された調査結果から得られた、比較的大きな規模のデータを用いて解析等を行うとともに、それを踏まえて今後、学校教職員がゲートキーパーとして機能するための方策案や具体的な知見等の提示がなされている点が評価できる。

次に、領域 2 の 2 つの課題は、非行を有する青少年とがん患者という、2つの自殺のハイリスク群に焦点を当てた上で、アンケート調査の結果や全国のデータ解析等の結果をもとに、自傷行為への誤解や偏見に係る冊子の作成や、医療従事者向けの自殺対策プログラムの検討等を進めている。

- ⑥「課題番号 R4-2-2」は、自傷行為に対し広く社会に流布する誤解や固定観念等を明らかにしたうえで、その解消とともに正確な情報を広めるための方策として心理教育用冊子を作成するなど、研究の意図と結果には現実性と具体性があることが評価できる。
- ⑦「課題番号 R4-2-3」は、がん患者の自殺の実態につき各種データを通じて把握するとともに、そのリスク因子を明らかにした上で、がん患者の自殺リスクを軽減するには精神的苦痛の緩和、医療スタッフ間のコミュニケーション、家族との情報共有が重要であるという知見を導出しており、これは対策の現場においても有用であると評価できる。

最後に、領域 3 の 4 つの課題では、昨今の発展が目覚ましい AI 等の最新技術とともに、自殺に関連し得る様々なデータを活用した調査研究が展開された。いずれも新たな切り口から課題等の分析を行っており、自殺対策の更なる推進につなげ得る様々な知見が導出された。

- ⑧「課題番号 R4-3-1」は、自然災害下や若年層など、医療機関にアクセスしにくい層への支援という困難な課題に対し、長期的な追跡調査と介入研究の両面から実証的に取り組まれており、アプリを活用した支援手法が一定程度、実装可能な形で示された点は評価できる。
- ⑨「課題番号 R4-3-2」は、サンプル数の少なさや、開発されたデバイスを用いての実証期間の短さなど、結果の信頼性を考える上で考慮すべき事項はあるものの、IoT デバイスを利用した自殺

対策の可能性という、新規性や革新性を示したという点で評価できる。

- ⑩「課題番号 R4-3-4」は、地域の薬局を拠点に自殺リスクを早期に発見し対応を図るという目標のもと、薬剤師がゲートキーパーとして機能する上で必要なエビデンスの構築を行うとともに、それを踏まえてゲートキーパーの養成を試みるなど、研究計画の立案段階から社会実装まで一貫しており評価できる。
- ⑪「課題番号 R4-3-5」は、法医学データと医療ビッグデータを関連させ、それを精緻に分析することで、自殺リスクの構造的把握を試みている。精神科医療に限らず、かかりつけ医など地域で何らかの医療との接点を確保することが、自殺対策の観点からも必要であることを示すなど、政策にも重要な示唆を与えており、評価できる。

このように、令和 4 年度の革新的自殺研究推進プログラムにおいて採択され、令和 6 年度に終了した 11 の研究課題からは、自殺対策のさらなる推進に寄与し得る、新たな知見が導出された。今後は、これらの研究を通じて得られた様々な知見を、報告書や論文等を通じた公表と併せて、広く施策や現場に生かすための方策を検討していく必要がある。

そのためには、自殺対策「現場」と「研究」と「政策」との連動性をさらに高められるよう、いのち支える自殺対策推進センターがその橋渡し役を担っていくことが期待される。

以上